青春スクロール 私の母校

麻布高校⑨（東京都港区）

自由な校風の陰に校長あり

麻布伝統の自由な校風を下支えしてきた歴代の校長。平秀明（たいらひであき）校長（55、1979年卒）は中高時代、化学部で実験に明け暮れた。「口べたで引っ込み思案」。校長就任の際、同級生から「平にできるのか」と驚かれた。

個性的な仲間に囲まれた学校生活は自由で楽しかった。研究職をめざしながら、大学卒業近くになって教師にひかれ、学士入学。回り道して教員免許をとった。

教師になって31年。最近の生徒について「どん欲さやエネルギッシュさが減った気がする。激しい受験勉強で燃え尽きてしまったのか、活力がほしい生徒もいる」。

「知識より、生徒のやる気を起こさせることが教師の役割」が持論。麻布には生徒手帳も制服も校則もない。教師は口を出したくてもできるだけ見守り耐える。面と向かっては「自分の中にしっかりした基準をつくり、自分で判断して行動しろ」を繰り返す。

「思春期だから、いろいろ失敗もある。それでも卒業するころには、どこに出しても恥ずかしくない青年になります」

前校長の氷上信廣（ひかみのぶひろ）さん（70、63年卒）は29歳で教師になった。大学院に4年間通い、政治思想を研究。大学紛争まっただ中で、自分は何がやりたいのか自問した結果、教師に行きついた。そこから教員免許をとった。

麻布も学園紛争を引きずっていた。学校に不信感を持つ生徒たちだったが、放課後に開いた読書会には約10人が集まった。真剣な表情に「気持ちに応えないと、ここに来た意味がない」という気持ちがわき起こった。

68歳まで39年間、現場に立った。生徒を通して時代の変化も感じてきた。生徒の文章から「自分はこう思う」という主張が減った。「どう書いたら評価されるか意識して、そつなく書く生徒が多い。これは非常に危ない。自分の意見なのか、他人の意見なのか、分からないまま書いている」

生徒に全力でぶつかってきた。最後まで楽しさは変わらなかった。「自由をよしとしている学校なので教師は大変。いつも生徒にためされる。でも教師もどこかでそれを欲している。面白がっている」。そんな同僚の教師に支えられてきた。

「中高時代に、世の中にはすごいやつがいるんだと思える先輩や仲間との出会いが大切。背伸びしているうちに、本当に背が伸びることがある。すごい出会いは、背を伸ばす原動力になる。そういう出会いがないと高をくくってしまう。自分の背はこの程度だとあきらめてしまう」（佐藤善一）

◇

次回は県立千葉高校です。

校長に就いて３年目の平秀明校長。「服装など外面の自由より、むしろ内面の自由を大事にしてほしい」

前校長で麻布学園理事の氷上信廣さん